

令和7年度 鈴鹿高専

青峰寮 広報誌 『青峰』



表紙デザイン 加藤るもい

校長 挨拶

「三重県の産業と半導体人材育成」

校長 藤本慎司



校長の藤本です。大阪から鈴鹿に来て2年近くとなり、鈴鹿市や三重県のことをだいたいわかってきました。伊勢神宮と「赤福」や鈴鹿サーキットは全国的に知られていますが、三重県とは結び付かないことも多らしく、私も三重県では伊勢神宮以外は来たことがなく、よく考えてみると伊勢湾を見たことはありませんでした。本校の在校生は9割が県内から来られていますので、学生寮に住んでいる皆さんの多くは三重県内出身のようですが、三重県のことをどれくらいご存じでしょうか。人口は174万人ほどで全国22位です。人口10万人以上の市が北から桑名、四日市、鈴鹿、津、松坂あり、これらの人口の合計が107万人となり、その他の市町を含めるとかなりの割合の人々が三重県北部に住んでいることがわかります。

さて、本校の学生さんたちは工学を学んでいるので地元の製造業にも関心を持ってもらわねばなりません。三重県の工業出荷額は全国で9位前後あり全国の3%余りで、県内では全産業のうち製造業の割合が3割くらい(統計により差異があります)で、全国平均約20%より大きく、製造業の占める割合が高いことがわかります。産業の構成は輸送機器(自動車)、電気・電子機器、化学(石油・プラスチックを含む)の3つがそれぞれ約1/4で残りはその他の製造業となっています。地域に特徴があって、四日市では化学が過半で電気・電子が1/4くらい、鈴鹿市といなべ市は自動車が7割前後、津市では情報産業が1/4でその他さまざまな産業があります。

四日市市は古くから植物油の一種である菜種油の製造がおこなわれていて化学工業の端緒があり、明治時代に伊勢湾内で最初の国際港が開設されたことに伴い、繊維産業や化学工業が多数興りました。第2次世界大戦後は旧海軍の燃料基地跡が石油化学工場として活用され、臨海地域に巨大な石油精製や関連化学工業が集積するようになりました。ただ、残念なことに1960年頃より石油化学工場から排出される有害物質のため、深刻な環境汚染が発生して多数の方々の健康被害をもたらしました。

鈴鹿市は第2次世界大戦期に海軍の飛行隊が置かれたとともに三菱重工などの大規模な軍需産業が発展しました。いまでも、鈴鹿高専周辺には当時の遺構が見られます。戦後、これらの広大な跡地にまず紡績などの産業が誘致され、鈴鹿市では内陸に大規模な工場が次々と建設されました。さらに、1960年にホンダが大規模な工場を建設して今に至っています。また、1962年には隣接地に鈴鹿サーキットが建設され、鈴鹿市は「モータースポーツのまち」として発展しています。鈴鹿高専がここに開学したのも同じく1962年です。また事情は異なりますが、いなべ市にはトヨタ車体の前身となる会社が第二次世界大戦後に操業を開始し、1993年より本格的に自動車の生産を担い、鈴鹿市とともに自動車産業のまちとし

て現在に至っています。

一方、三重県の電気・電子機器産業の生産額は20年以上にわたって全国1位です。しかも、2位の長野県を大きく上回っています。このことをご存じの方は三重県人でも大変少ないようで、主な製品は半導体です。四日市市の誘致に応じて東芝が内陸部に工場を建設し、1992年よりメモリーの種類であるDRAMを生産しました。1999年からは東芝が開発したフラッシュメモリーの生産を開始してNAND型フラッシュメモリーの世界有数の工場となり現在に至っていますが、会社そのものはその間に分社化されて外国資本も加わったキオクシアになりました。一方、桑名市にて富士通の三重工場が1984年に操業開始し、最新鋭の300mmウェハー対応のLSI製造拠点となり、スーパーコンピュータ「京」のプロセッサを生産しましたが、これも分社化され、現在は台湾のUMCグループに譲渡されてユナイテッド・セミコンダクタ・ジャパン(USCJ)となり、半導体製造受託(ファウンドリ)として主にロジック半導体やパワー半導体などを製造しています。台湾のTSMCが熊本に大規模な生産設備を設けていますが、UMCは三重工場を日本での拠点として発展させていくと思われます。

以上のように、三重県は石油・化学、自動車、電機・電子機器の3つが主要産業ということになります。特に、電機・電子機器に含まれる三重県の半導体産業は日本で最大の生産量をもたらしていますが、世の中であまり認知されていないのが課題です。この地域は水資源が豊富で各自治体が熱心に誘致したことによって半導体の一大拠点になりましたが、半導体の製造には様々な原料資材・加工資材が必要で、それらの大部分は化学製品です。四日市とその周辺にはもともとしっかりとした化学産業がありこれらが半導体産業を支えていることは重要な要因です。また、三重県内には半導体製造装置およびそれに関連する機器の産業も少なからず立地するようになりました。鈴鹿高専では来年度から「半導体人材育成」を本格化しますが、半導体産業は電気・電子工学のみならず、化学、機械工学、材料工学の多岐にわたり、特に化学が重要な要素です。さらに、これからは半導体をどのように使うかへのイノベーションが重視され、たとえば自動車が今後は情報機器と変貌していくように、従来の発想にとらわれない用途開発とそれに対応する半導体の設計に携われる広い視野を持った情報人材も必要になってきます。これまで本校の卒業生で半導体産業に就職する人は必ずしも多くないのですが、三重県には世界的な半導体製造拠点と関連する産業が集積しており、みなさんの将来の活躍の場の候補として考えてくだされば幸いです。

寮務主事補 広報担当 挨拶

「2026年丙午」

教養教育科 准教授 熊澤美弓

皆さんこんにちは。

今回も寮の広報誌をお届けできること、嬉しく思います。

昨年度改修されたA寮を新たに利用することになり、それに伴い、これまでとはいろいろ変化した面もあると思います。お互いに必要なことは話し合い、みんなが過ごしやすいように運用していきましょう。また、ここで新しくなったということは、これから先の長い間、鈴鹿高専の寮生として受け継ぎながらこの先の後輩たちが使い続けていくということです。大切に使いましょう。

2026年は「丙午（ひのえうま）」の年。世間では江戸時代の事件を挙げて、その俗信からこの年は実際に出生率が下がったという報道がされていました。諸説ありますが、本来「丙」は「草木の芽が地上に出て伸び、葉が広がった状態」を意味しており、「ひのえ（火の兄）」（陽の火）をあらわすのに使われました。

「午」はというと、もともとはお餅を搗くときに使う「きね」の象形文字です（「杵」の文字になったのはもっと後です）。その道具の使われ方から、「交差する」とか「折り返す」という意味を与えられました。動物の馬はあとからそこにあてはめられたかたちです。昔は1日を大体2時間ずつに分け、そこに十二支を当てはめて時間をあらわしました。十二支の7番目の午は大体午前11時～午後1時頃。だからそのちょうど真ん中の12時が「正午」になるわけですね。正午はお日様が一番高い位置にある時刻、同じく「陽の火」となります。つまり、本来は、陽の気が強い火が重なり合う年ということになります。火は情熱や行動力、勢いの象徴としても使われます。いろんな物事に挑戦したり、新たな始まりとして邁進したりするきっかけとしては、とても良い年ではないでしょうか。

ただ、常に全力で頑張り続けるのはいつの時代も難しいもの。清少納言の書いた『枕草子』には「たゆまるるもの」という章段があります。「たゆまるるもの」の「たゆむ」とは、「怠ける」とか「(気持ちが) ゆるむ」という意味です。「精進の日の行ひ。遠き急ぎ。寺に久しく籠りたる。」という短いもので、内容としては、「先祖の忌日などの肉を食べず仏道に励む日のお勤め、まだ先のことで余裕がある予定の準備、長い期間を寺院に籠って念仏・読経しているとき」に気持ちが緩んだり怠けたりしてしまうのよね、という内容です。

きちんとしなくてはいけないのに気が緩んでしまったり、まだ締め切りまで時間があると余裕をかましてしまったり、気を張らなくてはいけないことでも慣れて来たらおざなりになってしまったり、技術が進歩しても人間って千年前から変わらないですね(わざわざこうして書くということは、清少納言もついそうなっちゃうけれどこれは駄目だと思っていたということですので、言い訳にはしないように！)。

新任 寮務主事補 挨拶

「人生の分岐点」

教養教育科 教授 古野百合

私は大学4年生の夏(1993年)から、1年間カナダのブリティッシュ・コロンビア州にあるビクトリア大学に留学し、寮で生活しました。ビクトリアは、バンクーバー島の南端に位置しており、カナダ人が退職後に住みたい場所として人気のある自然豊かな、美しい街です。学部時代の専攻は政治学だったので、カナダ政治や比較政治などの授業を受け、慣れない専門用語やレポートに大変苦労しました。それでも、寮内で沢山の友達を作って毎日が楽しかったです・・・と続けたいところですが、留学生ということで大学院生も住む落ちついた寮(一人部屋)に入れてもらったこともあり、なかなか同年代の友達が出来ず、4か月で退寮し、日系カナダ人の友達と共同生活を始めました。ルームメイトと一軒家の半地下の3DKの部屋を借りて自炊する生活も楽しかったのですが、やはり今となっては寮での生活がとても記憶に残っています。食堂に出てくるパンケーキに美味しい本場のメイプルシロップをかけて毎朝食べたり、overcooked(茹で過ぎ)のパスタを食べたりしていたら超太ってしまったこと。大学のゼミの友達がカナダ旅行のついでに留学先まで会いに来てくれた時、とても太った私を見て「留学ってやっぱり大変なんだね」と同情してくれたこと。深夜までやっているキャンパス内にある映画館で、珍しいヨーロッパの映画をたくさん観たこと。合気道のサークルに入って失敗したこと、などなど。やっと心身ともにカナダでの生活に慣れて、もっとここにいたい、と思ったころには帰国でした。超氷河期と言われた1994年初夏、一人孤独な就職活動が待っていました・・・😞。

留学中に話を戻しますと、カナダでは当時マーガレット・アトウッド(Margaret Atwood, 1939-)という女流作家がとても人気でした。彼女の作品に、『侍女の物語』(The Handmaid's Tale, 1985)という近未来を舞台としたディストピア小説があります。これはジョージ・オーウェル(George Orwell, 1903-1950)の『1984』(Nineteen Eighty-Four, 1945)という、同じくディストピア小説に影響を受け、女性を主人公にアトウッドが書き変えたものでしたが、かなり過激な内容だったので物議を醸し出しました。2017年にドラマ化され、その人気ぶりは現在も衰えていません。その他にも、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)の『オーランド—』(Orlando: A Biography, 1928)との出会いがありました。これは留学中に映画化されていたこともあり、キャンパス内の映画館で観ました。こちらは時空や性別を超えるファンタジーものですが、とても不思議な映画だったのでぜひ原作を読みたいと思いました。大学4年生ではありましたが、この小説が、私が英文学の道を志すきっかけの1冊となりました。今から思えば、留学は私の人生にとって重要な分岐点だったのかなと思っています。これを読んでいる学生の皆さんにとって、人生の分岐点はいつ、どこにあるのでしょうか。楽しみですね。

「寮生、今昔物語的なお話」

電気電子工学科 准教授 橋本良介

寮生みなさま、こんにちは。電気電子工学科の橋本です。みなさまにも自己紹介したかと思うのですが、私は鈴鹿高専の卒業生で、なおかつ、寮生でしたので、そのときの思い出も交えながら、昔と今の違いなどを感じ取ってもらえればと思い、書かせていただきます。



私は専攻科を修了するまでのすべての高専生活を寮で過ごしましたので、4寮、A寮、2寮の（男子学生が入れる）すべての寮で生活したことがあります。当時の思い出を振り返るとまず思い出されるのは、2寮のことです。2寮は留学生と専攻科生のための寮で、専攻科で在寮を希望する学生はみんな2寮に残ることができました。4寮やA寮にいる頃は、2寮はすごく新しく、シャワーも完備で、床もカーペットだし、みんなの憧れの寮という感じでした。雨漏りで使えない部屋があるくらい老朽化してしまっているというのは、いささかショックですね。さて、専攻科の頃、サッカーのW杯がありました。日本はグループリーグを突破してベスト16に入り、非常に盛り上がりました。寮生も夜中の3時とか4時とかの時間に、多くの友達と談話室に集まってTVで見ていたのを覚えています。当時は大らかな時代でしたね。本田圭佑がゴールを決めたときなんかは、となりのA寮からも大歓声が上がっていたのを覚えています（大迷惑で今なら完全にアウトですね）。

さて話は変わって、今と一番違うところは？と聞かれたとすると、私はエアコンが無かったことかなと答えると思います。真夏は地獄でした。寮生たちは自分のフライパンに水を張って、談話室から大量の氷を入れ、扇風機の前に置いて「クーラー」とか言っていました（笑）。暑さだけでなく、湿気も大変でした。ドン・キホーテ（当時はアピタ）から置き型の除湿剤を買ってきて、大体1パック3個入りで、すべて同時に開けて、湿気を少しでも取り除きたい一心でした。意味があったのかはわかりません。

また、剣道部員だった私は、毎日朝稽古（いわゆる朝練）がありました。1年生の時は鍵の当番を任されていたので、朝5時過ぎに寮を出て道場に移動するために、夜点呼が終わったら、寮監の先生から寮の玄関の鍵を預かるという任務がありました。今では全く信じられませんが、寮の玄関の鍵を1年生の私が毎晩預かっているという状態でした。

まあ、今では信じられないようなことがいくつか出てきたかと思いますが、今でも変わらないだろうと思うことは、寮生活は貴重な時間で、今後の人生にも役に立つことが実感としてたくさんあるということです。みなさまも青峰寮を出たことを自信にして今後の人生を歩んでもらえればと思います。少しでもみなさまの助けになれるように努めたいと思いますので、何かあれば気軽に相談してください。

「学寮での勉強法」

教養教育科 講師 園田昭彦

2025年4月1日付で鈴鹿高専に着任しました、教養教育科の園田昭彦と申します。前職は徳島県の阿南高専で、9年間にわたり教育・研究に従事していました。主な担当科目は、1年化学、2年化学、化学特講です。

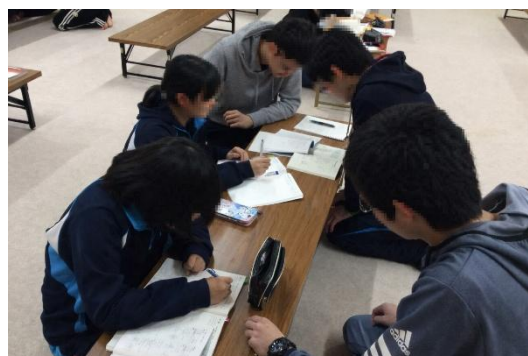
今年度より寮務主事補を拝命し、学寮運営に携わらせていただくこととなりました。鈴鹿高専での寮務担当は1年目となりますが、前職を含めると寮務に関わるのは3年目になります。複数の高専で勤務すると、学校ごとに文化や慣例の違いがあり、戸惑うこともありますが、同時に興味深く感じる点も多くあります。学寮もその一つです。

せっかくの機会ですので、私が寮務主事補を務めていた頃の阿南高専・明正寮についてご紹介したいと思います。明正寮では、全学生数約800名のうち、およそ300~350名が入寮していました。全寮制であり、1年生が通学する場合には、入寮免除願の提出が必要となっていました。

寮の日課は、6時30分までに起床し、天候に問題がなければ広場でラジオ体操を行います。その後、点呼、朝食、登校準備を経て登校します。午前中はすべての寮の玄関が施錠されるため、原則として寮室内で待機することはできません。授業や部活動終了後は、夕食、入浴、掃除や洗濯などを済ませた後、低学年は第1自習(20:00~21:00)、第2自習(21:30~22:30)の計2時間の自習を行います。各階の指導寮生が巡回し、低学年の学習を見守ります。その後、就寝準備を行い、23時に消灯・就寝となります。

私が寮務主事補を務めていた際に特に力を入れていた取り組みの一つが、週2回実施していた寮内勉強会です。1年生は第2自習の時間に集会室へ集合し、高学年の寮生から勉強を覚えてもらう機会を設けました。後期に入ると数学や物理で苦戦する1年生が増える傾向があったため、人に質問し、覚えてもらう学習姿勢を身につけてほしいと考えたからです。開始当初は参加を義務としていましたが、次第に自主的に参加する学生が増え、勉強会も活気づいていきました。

学寮生活の大きな利点の一つは、分からない問題をすぐに先輩や同級生に相談できる環境が身近にあることです。鈴鹿高専の青峰寮でも、談話室などで学生同士が教え合っている様子を耳にすることがあります。そのような学び合いを日常的なものとし、学習面のみならず、さまざまなことを気軽に議論できる環境が育まれることを期待しています。私自身も、そのような環境づくりに貢献できるよう、学寮運営に取り組んでいきたいと考えています。



新任 教員 挨拶

「高専における学寮の役割」

材料工学科 講師 東條敏史

2025年4月1日付で鈴鹿工業高等専門学校 材料工学科の講師として着任致しました東條敏史と申します。東京工業大学(現 東京科学大学) 生命理工学部、京都府立医科大学 医学部、東京理科大学 理工学部、東京理科大学 薬学部と色々なところに所属していましたが、初めて高専で研究・教育に携わることになりました。有機化学を専門としており、「こんな構造を持っていたら、社会に役立つ機能を発現できるのではないか?」と分子をデザインし、有機合成を駆使して自ら作り上げて、実際の機能を評価する研究をおこなっています。授業としては、本年度前期に有機化学(3年生)、創造工学(4年生)、後期に材料工学序論(1年生)、材料工学実験(3年生)、複合先端マテリアル(4年生)、高分子物性(5年生)を担当しています。今年度は何回か既に寮監業務を担当しているため、夕方頃に寮の食堂で、夜間に寮事務所で私を見たことがある寮生もいるかと思えます。

さて、高専の学寮は寮で生活する学生が安全で健康的な日常を過ごし、人間的に成長していくための教育施設の一部として運営されています。寮監業務を通じて、私は 1. 立場の異なる人とのコミュニケーションの取り方の育成、2. 自主的・自発的な運営とそれに伴う責任の理解に対して寮生活は大きな役割を担っていると感じております。1に関してですが、高専は一番上の学年と一番下の学年では 5 歳もの年齢の差があります。専攻生も含めるとその差はさらに大きくなります。新入生は寮生活をする際、わからないことが多いので上級生に尋ねることになります。その時に立場の異なる上級生に馴れ馴れしく礼を失ってコミュニケーションを取るの望ましくありません。一方で、上級生も過度に威圧的に接するのは避けるべきであり、齟齬の生じないようわかりやすくコミュニケーションを取る必要があります。このやりとりは社会に出ても同じように生じます。寮生活はこのようなコミュニケーション能力の育成に非常に有効であると考えています。

2に関してですが、本校の学寮は学生が自主的、自発的に寮の運営に参加しやすいように運営体制を整えております。つまり、寮生の皆さんが組織を動かすことのできる立場にあるということになります。是非認識して欲しいのが、組織を動かす立場にある人間は、何か問題が生じた時その責任を取らなければならないということです。寮生の皆さんの寮生活の仕方ですら問題が発生したらその責任の一端を皆さんが担わなければなりません。これは社会に出ても同じです。皆さんの年代でこのような体験をできる機会はそう多くないと思えます。

皆さんが社会に出る際に学寮での体験が役に立ったと思えるような寮生活を是非送って下さい。私も全力でサポートしていきます。

各寮長 挨拶

「寮生活を通して得た成長と学び」

1寮 前期寮長 伊藤佑菜

1寮前期寮長を務めさせていただきました、生物応用化学科4年伊藤佑菜です。この経験を通して、寮は単なる生活の場ではなく、人として成長できる環境であると強く感じるようになりました。私は寮長として、日常の運営や行事の調整を行い、時には寮生同士の意見の衝突に対応する役割も担ってきました。責任の重さを実感する場面は多くありましたが、その経験を通して、周囲の状況を冷静に把握し、自ら考えて行動する力や、相手の立場を尊重しながら物事を進める姿勢が身についたと感じています。

寮生活の大きな魅力の一つは、通学にかかる時間や負担が少ない点です。移動時間が短縮されることで生活に余裕が生まれ、睡眠や食事の時間を安定して確保できるようになりました。その結果、日々の体調管理がしやすくなり、学業や課題に集中して取り組める環境が整いました。限られた時間を意識的に管理し、有効に使う習慣が身についたことは、自己管理能力の向上につながったと感じています。

また、寮には学科や学年の異なる学生が集まっており、自然と交流の幅が広がります。普段の授業では関わることのない学生と日常的に会話を交わす中で、多様な価値観や考え方に触れる機会が増えました。実際に、他学科の寮生とのつながりを通して助言をもらったり、協力し合ったりする場面もあり、寮ならではの人間関係の強さを実感しています。

一方で、共同生活である以上、生活習慣や考え方の違いから相手の短所が目につくこともありました。しかし、距離が近いからこそ相手と向き合い、対話を重ねながら理解しようとする姿勢が求められます。そうした経験を積み重ねる中で、他者を受け入れることの難しさと同時に、その大切さを学ぶことができました。

良い点だけでなく課題も含めて、四年間の寮生活は私に多くの学びと成長の機会を与えてくれました。ここで培った経験や人との関わりは、今後の人生においても大きな財産になると考えています。

最後になりますが、これまで寮生活を支えてくださった寮の先生方や職員の皆様に、心から感謝しています。日々の見守りや声かけ、さまざまな場面でのご支援のおかげで、安心して寮生活を送ることができました。本当にありがとうございました。



「学びと成長の半年間」

1寮 後期寮長 地主 藍里

今年度一寮後期寮長を務めさせていただきました。電子情報工学科四年の地主藍里です。半年間と短い間ではありましたが、寮長として多くのことを学び、様々な経験を積むことができました。慣れない役割に戸惑うこともありましたが、その一つ一つが自分自身の成長につながったと感じています。また、共に寮役員として活動してくれた皆さんの存在には心から感謝しています。日々の寮内での業務や行事の運営を協力しながら取り組んできたことは、今振り返っても大切な思い出です。

私たちの代はコロナ禍の影響をぎりぎり受けた学年であり、下の学年との関わりが低学年の寮生たちに比べて少ないと感じていました。そのため、寮生同士のつながりをより深めたいという思いから行事やイベントの企画・運営に積極的に関わってきました。学年を越えた交流の場をつくるのが、寮生活をより充実したものにすると思ったからです。

新たな取り組みの一つとして、昨年度は規模を縮小して実施された追い出しコンパを、今年は男子寮も巻き込んだ、より大きな行事として企画しました。この行事は一からの企画となり、準備や段取りにおいて至らない点や不安に感じる部分も多くありました。実際に、進行面で反省すべき点もあり、決して完璧な運営とは言えなかったと思います。

それでも、準備段階から多くの寮生が協力してくれたおかげで、行事を無事に成功させることができました。仲間の助けがあったからこそ乗り越えられた経験であり、協力の大切さや、支え合うことの心強さを改めて実感しました。この経験は、寮生同士のつながりを深めるだけでなく、私自身にとっても大きな学びとなりました。

こうした活動を通して、特に心に残っているのはリーダーシップの在り方について学べたことです。寮長という役職に就いた当初は、全てを自分が決め、先頭に立って引っ張らなければならないと考えていました。しかし実際には、一人でできることには限界があり、周囲の協力がなければ何も進まないという現実と直面しました。人の意見に耳を傾け、任せる勇氣を持つこと、そして必要なときに責任を取ることの大切さを学びました。

寮長としての半年間は、決して順風満帆ではありませんでした。思いがうまく伝わらず悩んだことや、自分の力不足を痛感した場面も数多くありました。それでも、そのたびに支えてくれた寮役員や寮生の存在があり、前向きに取り組む事ができました。失敗や反省を通じて、人と向き合う姿勢や言葉の大切さを学べたことは、何にも代えがたい経験です。

この半年を振り返り、寮長を務めたことで、責任感や協調性、自分とは異なる考えを受け入れる姿勢が身についたと感じています。この経験は、これから社会へ出ていく中でも、必ず生かされるものだと思います。

最後になりますが、日々の寮生活を支えてくださった教職員の皆様、そして共に過ごした寮生の皆さん、本当にありがとうございました。この寮がこれからも多くの経験ができ、人として成長できる場であり続けることを願っています。

「5年間の寮生活を振り返って」

A寮 寮長 谷水樹

今年度、高学年（4，5年）男子寮であるA寮寮長を務めさせていただきました，5年電気電子工学科の谷水樹です。この5年間の寮生活での様々な経験を皆さんに共有したいと思います。

一つ大きく思い出に残っているのは、今年度改修工事が終わったA寮で生活できたことです。高専に入学した時から改修工事の話は聞いていましたが、予算の問題や工期によっては在学中には新しくなった寮に入れれないのではないかと不安になっていました。しかし、高専ラストイヤーで入ることができました。各居室のルームライトがリモコンで操作できるようになったり、換気扇が付いたり、何より、梅雨にはペタペタ、冬にはキンキンになる天候に影響されまくる床が、どんな天候にも影響されないタフな床になったことなど、様々な恩恵を肌で感じています。現在在学中の低学年の寮生の皆さんは4寮での過酷な生活の後には、悠々自適なA寮での生活が待っていることを励みに頑張してほしいと思います。

この文章を読んでいる入寮を考えている皆さんに気を付けてほしいことは親の目がないということを理由に生活のレベルを下げてしまうことです。私は学年が上がるにつれて、生活レベルと学業の成績が下がっていききました。明確な理由は、深夜までスマホやパソコンと向き合い、寝つきが悪くなり十分な睡眠を確保できず、1日の最重要項目を「朝点呼」としてそれさえできれば朝ごはんも食べずに二度寝してしまうことです。それをしてしまうと、授業や課題に身が入らなくなり、周りより勉強への理解が遅れてしまい一気においていかれてしまいます。高専への入学を考えている皆さんは「こんな人間にはなりたくない」と感じることができるその感性を大事にしてください。こうならないためにできる対策としては「洗濯を後回しにしない」、「部屋のどこからでも見えるところに時計を置く」などがあげられます。みなさんには自立した生活を心がけてほしいと思います。

最後になりましたが、せっかくこの文章をここまで読んでくださっている皆さんには、私を反面教師にさせていただき、ハイレベルな学生生活、寮生活を送ってほしいと思います。寮生活を終わるときに「寮に入ってよかった。」と思えるように、自分を律してください。ありがとうございました。



「5年間振り返って」

2寮 寮長 岡島大正

今年度、2寮寮長を務めさせていただきました、岡島大正です。私は5年間の寮生活を通して、多くの魅力的なことと苦勞をしたことなどの経験してきたことをお伝えしたいと思います。

入寮した当初は、コロナウイルスの感染症対策の影響で行事や交流の機会が制限され、入寮して約2か月で一人部屋となりました。そのため、先輩とのつながりや同学年とのコミュニケーションが取りにくく、寮生の中で友人ができるのか不安を感じていました。また交流の場でもある寮食堂でもパーティーや、学年の時間の規制などがあり、コミュニケーションの機会が制限されていることがありました。

しかし、日々の寮生活を共に過ごす中で、少しずつ会話が増え、自然と仲が深まってきました。気が付けば、同学科の通学生よりも寮生の方が仲が良いと言える友人ができていました。普段であれば関わることのないような人とも生活を共にし、学年や学科を越えて仲が深まることこそが、寮生活の最も魅力的な点であると感じています。

また、コロナウイルスの感染状況が落ち着いた後には、居室間の移動が可能となり、寮生同士の交流がより活発になりました。テスト期間中には友人に勉強を教えてもらうことや、4・5年生には門限の時間が21時20分になったことにより、食事を終えた後に友達と一緒にトレーニングなどするような自由な時間が増えたことによって、通学生ではなかなか体験できない貴重な経験を多く得ることができました。これらのことも寮生活ならではの魅力だと感じています。

今年度の2寮は、A寮の改修工事が終了したこともあり、少人数で利用する形となりました。2寮は他の寮と比べて一部屋一部屋が広く、シャワールームも完備されており、快適に生活することができました。一方で、梅雨の時期など雨が続く際には、3階で雨漏りが発生するなど、老朽化への不安も感じられました。そのため、来年以降も良好な環境を維持できるよう、寮生一人一人が施設を大切に扱い、日頃からきれいに保つ意識を持って生活していくことが重要だと感じました。

この5年間の寮生活はかけがえのない思い出になったと思います。この思い出は仲良くなってくれた友人たちにかいたからこそその思い出です。この貴重な寮生活での経験を社会人になっても活かして行きたいと思います。

最後になりましたが、寮を運営して下さった寮務主事の先生を初めとした先生がたや、寮事務所の方々、寮母さん、寮食堂の方々に深く感謝します。

在校生の方々は楽しい寮生活を送れることを願っています。

「寮長としての1年」

4寮 寮長 森嶋淳太

4寮の魅力は、なんといっても「人と人とのつながり」です。授業や部活動で疲れた日でも、同部屋の仲間と交わす何気ない会話や、廊下ですれ違うときの一言が元気のもとになります。4寮は1~3年生の寮生が暮らすため学年や学科の壁を越えて関わるが多く、互いに刺激を受け、物事に対する視野を広げることができます。ここで築かれる人間関係は、学校生活だけでなく、これからの人生においても大切な財産になるはずです。

今年度は、清掃活動、防災訓練など寮生全員で協力する場面が多く、そうした活動の中で一人ひとりが自分の役割を意識し、責任を持って行動する必要性を求められる場面が何度もありました。そのような状況下で、上級生が下級生を気にかけて自然に声をかけ合う様子が何度も見られ、4寮ならではの温かい風景を感じられました。

寮生活は決して楽なことばかりではありません。集団で生活する中では、意見の違いや価値観のズレもあります。一度気が緩んでしまうと、なかなか悪い状態から戻ることも困難です。しかし、そのような場面をどのように乗り越えるのか、ここが成長のチャンスです。相手を理解しようとする姿勢、そして自分の考えをしっかりと伝える勇気を持つことで、人として大きく成長できるのだと感じています。

寮長としてこの1年過ごして、改めてこの寮生活の楽しさを感じました。友達と談話室で料理をしたり、集まってテスト勉強をしたり…なにより寮長となったことで様々な寮のイベントにも参加でき、学年の壁を越えて話しかけてくれる1・2年生も多く、学年の壁を越えて語り合えるこの環境がとても楽しかったです。

個人的なこの寮（というか鈴鹿高専）の大好きな点として、近くに鈴鹿サーキットがある点です。僕は小学生のころからレースが大好きで、鈴鹿サーキットでビッグレースがあるときはよく放課後に自転車でサーキットへ行って練習走行を見に行っています。自転車で20分ちょっとでサーキットに行ける環境…ああ素晴らしい。行ったことのない人にはぜひ1度行ってほしいです！

これからの4寮生に対して、4寮のみなにはもっと「夢」を持ってほしいです。そしてその夢を達成するために小さな「目標」を持つこと、これは今の寮生活で自発的に行動するうえで大きな原動力となるはずです。規律正しく、そして元気よく、これからも4寮で生活してもらえることを願っています。



**今年度の広報誌は以上になります
どうもありがとうございました！
また来年度も宜しくお願いします**



今年度は
男女共同で 5 年生を送る
会を開きました！

